

語りの現在の視点

岸 彩子 (青山学院大学非常勤)

Soudain tous les regards se tournent vers la porte のような、過去の事行を表すいわゆる語りの現在は、出来事が今起きているかのように表す現前効果を狙ったものとされる。では同じく過去の事行を表す En 1940, le général De Gaulle part à Londres, il lance un appel le 18 juin. の現在形も上記の例と同じ効果があるのだろうか。

本発表では、現在形には時間性がなく domain of discourse (Recanati 1996) が文脈によって設定されていることで事行の時間が限定されるという仮説のもとに、以下のように考える。語りの現在には事行を捉える視点の取り方の違いによる異なる二種類がある。一つは文脈で構築された状況「その時その場」に位置する擬似的な知覚者を想定するもの、もう一つはあるものごとの全体を視界に入れるものである。現前効果は前者にしかない。「その時その場」の状況が文脈から与えられる情報で十分に受け手に了解されている場合には、その一時点が domain of discourse となり、そこでの知覚を表す出来事文と解釈される。一方、文脈全体があるものごとについて語るものであるという限定が強く働く場合には、ものごとが存在する時間全体が domain of discourse となる。この domain は事行の生起時点を含む複数の時点を包括しているため、一時点にのみ限定される知覚を表すことはできず、事行はそのものごとの属性を構成する一要素として提示される。